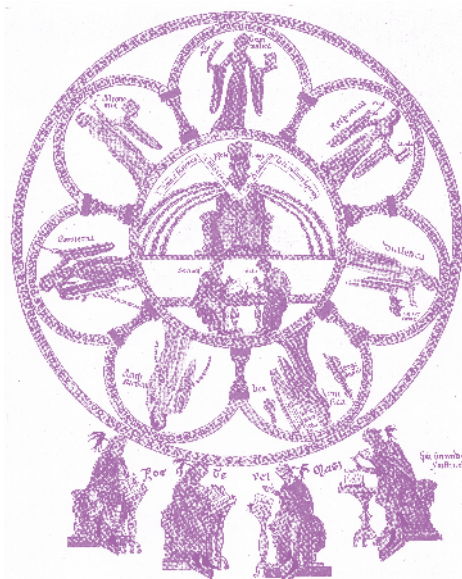


Newsletter 29

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第29号 / 2016年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 教養研究センター所長として2期目に臨んで
- 特集Ⅰ 「情報の教養学」
- 特集Ⅱ 「身体知・音楽」「晴読雨読」「カドベヤ」
- 特集Ⅲ 「庄内セミナー」
- 特集Ⅳ 「HAPP」, 「学習相談」
- 特集Ⅴ 研究と交流の場「研究の現場から」
荒木文果 / 大野真澄 / 沼尾 恵 / 申川真知子
- 活動予定 11月～2017年3月、日吉キャンパス公開講座 他
私の〇〇自慢



教養研究センター所長として2期目に臨んで

教養研究センター所長
小菅隼人 (理工学部)
Hayato Kosuge

教養研究センターでは、7月22日の大学評議会での承認を経て、本年10月より小菅が所長として2期目に入ります。それに伴って、コーディネート・オフィスも新体制となります。引き続き副所長をお引き受けくださった片山杜秀さん(法学部)、新副所長の高橋宣也さん(文学部)、新島進さん(経済学部)には、10月からよろしくお願ひいたします。3期6年にわたって副所長を務められた大出敦さん(法学部)、広報担当としてご尽力いただいた工藤多香子さん(経済学部)にはたいへんお疲れさまでした。有難うございました。

この2年間で、教養研究センターは、新しい事業——神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座への申請・採択、新たな寄附講座の設置、読書会推進企画——を始めました。庄内セミナー、日吉学、カドベヤなどの事業は新たな組織化の検討に入ります。その意味では、教養研究センターはさらに事業を拡大したと言えます。しかし、私は、2年前に所長に就任した時に、教養研究センターの目的を「〈教養とは何か?〉〈教養はどのような役割を果たすのか?〉〈教養は何のために必要か?〉という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うこと」と決めました。その認識はずっと持ち続けていましたが、この2年間はそれには全く手がつけられませんでした。今期こそ

はと決意を新たにして取り組みたいと思っています。

「教養」は二面性をもっています。すなわち、一方で、「学問・芸術などにより人間性・知性を磨き高めること」(『広辞苑』)という意味で、社会人が持つべき“姿勢”を意味します。福澤先生が『学問のすゝめ』で説こうとしたのはそのような“勉強する近代人”であったと私は解釈しています。他方、教養は、その時代、その場所によって大きく内容を変えるものでしょう。江戸時代には江戸時代の、昭和には昭和の教養があり、現代には現代の教養があり、また、若者には若者の、年長者には年長者の教養があり、その職業や活動範囲によっても内容が変わってくるはずで、コンピュータやネット検索の知識は私が学部生の時には専門家のものであって、教養としては存在しませんでした。

次の2年間では、教養における普遍的性格を議論して見定めること、個別的形態を調査しそのあり方を蓄積していくこと、その二つを通して何かが見えてくると信じて、教養研究に取り組みたいと思っています。多様な知の集合体である日吉キャンパスの研究力をもってすれば、教養の意義を論じつつ、かつ、教養の「かたち」についての知見を積み上げていくことは十分に可能であり、また、教養研究センターにしかできないことかもしれない。そしてその中にこそ教養の普遍的本質が確かに在る、という作業仮設のもとに、愚直に研究活動を積み上げいき、折に触れて統合的に振り返っていくことで、研究センターとしての使命を果たしていきたいと思ひます。皆さまのご支援、ご助言を何卒よろしくお願ひ申し上げます。



情報の教養学

情報とリスク

2016年度の「情報の教養学」では、情報とリスクに着目しています。現在、ネットサーフィンやメールなど、誰でも日常的に情報を受発信できます。しかし、自分の発信した情報が思わぬ影響を与えるなど、リスクを伴います。こういった情報とリスクの関係について、一流の講師により、春・秋学期を通じて合計6回の講演会を開催しています。春学期では、まず池上彰氏（名城大学）が、活版印刷、ラジオ、テレビ、インターネットなど様々な形態によるメディアが各時代にどのような影響を世の中に与えたかについて解説しました。次に、福井健策氏（弁護士）は、パクリと著作権、そしてパクリがきっかけとしたネット上の炎上について講演しました。最後に、生貝直人氏（東京大学）は、忘れられる権利に関わる現在の様々な問題について解説しました。いずれの講演も大盛況でした。なお、秋学期は、SNS（江口清貴氏：LINE（株））、マイナンバー（上原哲太郎氏：立命館大学）、セキュリティ（寺田真敏氏：（株）日立製作所）に関する講演です。（高田真吾）

メディアは世界をどう変えてきたか

池上彰氏は、様々な例を通して、ラジオ、テレビ、インターネットなどの媒体を通じた情報が、世の中にどのような影響を与えたか解説して下さいました。情報を発信する側はうまく利用すればよい方向に行く（例：熊本地震の支援物資調達）が、意図に反した結果もあり得る（例：ベルギーの南北分裂を誘発してしまった架空の物語）ことをとりあげました。また、情報によって人間が操作される可能性にも注意する必要がある、メディアは必ずしも中立な立場をとっているわけではないことを述べました。いずれも頭の中ではわかっていることですが、改めてその重要性を感じ、アンケート結果を見た結果、参加者もその重要性に気づかれたように思えました。また、メディアの成長は戦争による部分が大きい、という個人的には考えたこともない話もありました。主会場と副会場（遠隔放送で参加）を合わせて、600名以上という情報の教養学講演シリーズでは過去最高の参加者で、会場は熱気に包まれました。（高田真吾）



「パクリ炎上」とウェブ世論

パクリや盗作はいけないこと。もちろんそれを犯した人は責任が問われるべき——まったくその通りです。でも、どこからが盗作で、どこまでがオリジナルなのかの判定はとてつもなく難しいことです。昨年度も「情報の教養学」にお越しいただいた福井健策氏ですが、今年度はこの盗作判定の難しさについて、2015年に起きた東京五輪エンブレムをめぐる盗作疑惑騒動を具体例にあげながら解説して下さいました。著作権侵害に詳しい弁護士の立場からみると、この疑惑を盗作と断定するのは法的には難しいとのこと。ではなぜ大きな騒動になったのか。その背景には、盗作の有無以上に「炎上」というインターネット社会特有の問題があると指摘されました。ウェブ上で形成される「世論」がごく一部の人の操作から生まれている可能性があること、匿名ゆえに発言や評価が過剰化しやすいことなど、ウェブ世論の特徴を整理されたうえで、炎上にまきこまれたらどう対処すべきなのかを具体的にご教示下さいました。ネットは使い方を間違えるととんでもない「暴力」になることは、SNSなどを利用する機会の多い学生には特に重要な指摘です。非常に有意義な講演だっただけに、参加学生の数がやや少なめだったのは残念でした。（工藤多香子）



グーグルと国家：デジタル時代の記憶と忘却

あなたが忘れたい過去の情報を、知らない誰かが自由に閲覧しているかもしれない。このような問題提起から始まり、生貝直人氏は、現在ネット上を漂流する無数の個人情報やデータをどう扱うかは、グーグルをはじめとする巨大プラットフォーム企業の判断に委ねられている、つまり、彼らがわたしたちの記憶や忘却を実質的に支配している、というぞっとする事実を指摘されました。講演では、欧米や日本での「忘れられる権利」をめぐる議論の紹介、また「忘れられる権利」と「表現の自由」や「知る権利」をどう両立させるかといった問いかけなど、デジタル時代に登場した新たな問題をめぐる現状を解説してくださっただけでなく、この問題を通じて国家の役割にまで踏み込んだ深い議論を展開してくれました。日常的にネットを利用するのがあたりまえの世の中を生きている学生たちには、差し迫ったテーマだったようで、100名ほどの参加者は熱心に耳を傾け、質疑も活発で盛況な講演会となりました。（工藤多香子）



身体知・音楽

古楽への取り組み

「身体知・音楽 I II」と「身体知・音楽 III IV」は、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としています。前者は、「住友生命保険相互会社寄附講座」として、また後者は「株式会社龍角散寄附講座」として開講されています。「身体知・音楽 I II」には器楽部門と合唱部門があり、それぞれで異なる担当教員が学生を指導しています。「身体知・音楽 III IV」は、声楽の発展クラスであり、「身体知・音楽 I II」を履修している、もしくは履修したことがある学生のみが受講できます。そこでは、個々の学生の声楽の能力が伸ばせるような指導が行われています。

器楽部門は、いわゆる「古楽」と呼ばれる音楽に取り組んでいます。扱っているのは主に、16世紀末から18世紀前半までにヨーロッパで書かれた作品です。授業に参加している学生はそこで、当時の楽器もしくはその復元を用いて、その頃に書かれた音楽がどのように演奏され、人々にどのように受け入れられていたのかを体験しながら学んでいます。このような授業は、総合大学では世界的に見てもあまり例がなく、日本においては、音楽大学においてさえずりかな数が存在するのみです。参加者は約20名で、前期は主に室内楽作品を、そして後期はオーケストラ作品を取り上げています。

声楽部門においては、約40名ほどの参加者がいます。ここでは、古い音楽に拘らず、現代作品も積極的に学びの対象として含めています。

これら授業の成果発表は、主に公開演奏会という形で行ってきています。そこには、社会還元の意味合いをも持たせてあります。2016年度は、器楽クラスは計2回、声楽クラスは1回の公演を日吉で催します。(石井 明)

晴読雨読



キャンパスにもっと読書の楽しみを！ 読書会推進企画「晴読雨読」スタート

最近、学生のあいだであまり聞かなくなったけど、読書会って学生時代の楽しい思い出よね——という中年教員のノスタルジーからこの企画は誕生しました。現在進行しているのはエマニュエル・レヴィナス著『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』の読書会です。昨秋からの試行期間を経て、今年度4月27日に本格的にスタート。6月3日、6月29日、8月3日、10月5日とほぼひと月に一回のペースで集まってきました。まだまだ継続中です。今からでも参加できます。ポスターやHPで最新の情報をお伝えしますので、興味のある人はぜひのぞいてみてください。うれしいことに参加者の半分ぐらいいは学生です。レヴィナスの専門家である商学部の渡名喜先生に導かれながら、学生も教職員も思ったことを自由に発言し合い、少しずつ読み進めています。学生にとっては少し難しい本に背伸びして挑戦する良い機会ですし、教職員にとっては学生気分に戻れる楽しい時間です。

教養研究センターでは、この他にも読書会の企画を随時募集しています。いつもどこかで何かの読書会が行われている。日吉キャンパスをそんな空間にしていきたい。

(工藤多香子)

カドベヤ



カドベヤ、6回目の夏

2010年の6月に横浜市中区にカドベヤを開所してから6回目の夏を迎えました。今年度は、横山千晶さんのサバティカルに伴い、私が責任者を務めています。毎年、夏休みには、子供たちを含めいろいろな人が参加し、常連さんになることも多いため、特別な企画を立てることが4年ぐらい前から恒例になっています。今年のテーマは「しあわせ」。幸福学を研究している私が、知り合いの研究者にも声をかけて4回の講座を行いました。最初の2回は自分を見つめ直すワークショップ。後半の2回はProject Design Office 主宰の中村一浩さんをお迎えして静かに自分の心を開く対話の回としました。今年度も例年同様多くの方が訪れてくださいました。自分の夢を語ったり、自分自身の身体に向き合って感謝したりすることで、参加者は、しあわせの種が自分の中に眠っていることに気がついたようです。ワークショップの前後には、カドベヤにかかわってくださっているマジシャン、シリウさんに伝授してもらったマジックを互いに披露したり、よさこいを踊っている参加者から踊りの手ほどきを受けたりとしあわせの交換も行われました。

(前野隆司)



第7回 庄内セミナー 「庄内に学ぶく生命 (いのち) >—心と体と頭と—」



お山のご加護でつつがなく

大型の台風10号が日本に接近。予報は8月30日に庄内を直撃する可能性が高いと告げていました。セミナーは29日から。同日日中はまだ大丈夫。しかしあとはどうなるか。仮に予報通りでも行える催事はあるに違いない。セミナーは決行されました。29日昼、参加者は鶴岡タウンキャンパスに集合。旧庄内藩主酒井家の現当主忠久氏に「庄内の歴史と文化」という演題でおはなしいたき、宿泊先の休暇村羽黒に移動。夜に、庄内研究の泰斗東山昭子氏から「庄内にまなぶ生と死」と題する真情溢れる東北談義を伺う頃には、雨風も強くなってきました。明日は大丈夫か。案外と大丈夫だったのです。台風は予報より北にそれました。30日の雨風は催事の障害にはなりません。そもそも30日の予定に野外活動はなく、バスで移動できれば大丈夫。それが幸いしました。湯殿山の注連寺で即身仏拝観。松ヶ岡開墾記念館見学。致道館で『庄内論語』素読。先端生命科学研究所訪問。所長の富田勝氏に御案内いただき、夜は引き続き休暇村羽黒で富田氏の刺激的な講演「生命はどのようにヒトに進化したのか、そして君は何のために生きているのか」。すべて順調。そして天候の回復した31日の日中は羽黒山での修験体験。深夜には出羽三山神社での八朔祭見学。そのあいだには教養研究センター副所長の大出敦氏の講演「修験と古代人の魂観」。もしも30日が修験体験の予定だったらセミナーに重大な支障が生じていました。庄内の方なら「お山のご加護」と言うでしょう。1日昼、現地解散。全日程を無事終えました。(片山杜秀)

慶應義塾の理念と庄内セミナー

鶴岡から帰って来て、自身が庄内セミナーを通じて感じたことを思い返してみました。すると、今回の体験は慶應義塾の理念と密接に関わっていることに気がきました。中でも特に「半学半教」、「自我作古」、「社中協力」の3つの精神を目の当たりにしました。今回のセミナーでは、我々塾生が多くの議論を交わしました。マインドマップ作成、講演後のディスカッション、懇親会などの様々な場面で皆が各々の意見を述べ、他者の思考に触れました。これこそが「半学半教」だったのではないのでしょうか。

更に、講演の中で鶴岡にキャンパスが設置された経緯や、その挑戦に対する周囲の冷淡な評価と、その評価に反した成功の数々を知りました。この挑戦が「自我作古」なのだと思います。

他には先端生命科学研究所の見学で見た設備投資、そして庄内セミナーの開催は、鶴岡市の協力だけでは到底できないことだと考えました。これらは多くの教職員や塾員の方々の協力によって成り立っていることでしょう。このセミナーで「社中協力」の伝統を感じることができました。

庄内セミナーに参加したことで、慶應義塾の素晴らしい伝統に間近に触れ、自分もその伝統を継承していく塾生であるということに改めて誇りを感じました。その誇りを持って、これからの人生を生きていこうと思います。(文学部1年 奥山信二郎)



生きる意味を知る旅

生きる理由を見いだせなくなっている人間が増えているように感じます。昔の人が何を考えて生きていたのか参考にしたいと思い、このセミナーに参加しました。

セミナーは濃密な体験の連続でした。鶴岡の自然と美味しい食べ物に囲まれながら、原初の信仰や輪廻について学ぶことができました。人文系だけでなく、富田勝教授(環境情報学部)の講演もあり、生命の不思議さについて再認識する機会となりました。何よりも素晴らしいのは、毎夜行われた議論です。普段話す機会のない他学部の方々と、深いテーマについて、夜が更けるまで議論したことはかけがえのない時間になりました。

そして、印象に残ったのは山伏修行体験です。修行は心を無にするために行うとのことでしたが、滝打ちの修行の際、私はむしろ童心に帰ったような感覚になりました。もしかすると、心を無にするとは心を無くすということではなく、自然と心とを同化させ境界を無くすことなのではないのでしょうか。

宗教も科学も、遺伝子にプログラムされた死への恐怖と生への喜びが、大自然への畏敬の念を生んだ結果生まれたものなのでしょう。つまり、2つは私たちが思った以上に似たものなのではないでしょうか。昔の人も今の人も、死に恐怖し、生き、社会を作っているのです。私たちが生きているのは、様々なことを体験し、死に恐怖し生を喜ぶためなのでしょう。

このセミナーへの参加は、人生について考える良い機会、今後のための大切な経験となったと強く感じます。(医学部3年 辻田真秀)



生命は循環する

庄内セミナー初日、生命についてマインドマップを作る時、私は生命は循環であるという一つの分岐を作りました。しかし、その時はただ肉体的な循環、「生まれる、生きる、死んでいく」しか考えていませんでした。

4日間の庄内セミナーで様々な話を聞き、体験した後、もう一度マインドマップと向き合ってみると、新たな発見ができました。私は生命の循環を肉体と精神に分けて考えました。東山昭子先生の「庄内の文化・風土・食」の話から、生命の終わりは本当の終わりではなく、また他の形に変えて、続いていると感じました。また、庄内論語の体験を通じて精神の循環を感じました。私は中国生まれ中国育ちなので、中国の文化の一つである、孔子の論語が海を越えて、日本の皆さんに知られるようになり、また、代々伝わってきたことに感動しました。精神の循環はすごいと思いました。

注連寺の住職さんがおっしゃった通り、申年生まれの私にとって今年は大変ご縁のある一年です。幸運に恵まれて、今回の庄内セミナーに参加でき、たくさん素敵な方々と出会え、面白いことをたくさん知ることができました。そして、今、私の体験談を読んだ方が、来年庄内セミナーに参加し、庄内セミナー魂を引き継いでいただいて、新しい循環ができれば幸いです。

(経済学研究科修士課程2年 高レイショウ)



実施期間: 8月29日(月)~9月1日(木) [3泊4日]
場所: 慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他
参加人数: 学部学生25名、院生2名、スタッフ8名 合計35名
講師: 富田勝(環境情報学部教授、先端生命科学研究所所長)、大出敦(法学部教授)、東山昭子(鶴岡総合研究所研究顧問)
参加費: 学部学生・大学院生: 2,000円
※ 現地までの往復交通費は自己負担(現地集合・現地解散)
宿泊場所: 休暇村羽黒(鶴岡市)

スケジュール

1日目	・現地集合(鶴岡タウンキャンパス) ・「生命」に関するマインドマップ1作成 ・「庄内にまなぶ生と死」 講師: 東山昭子(鶴岡総合研究所研究顧問)
2日目	・即身仏拝観(注連寺) ・松ヶ岡開墾記念館見学 ・庄内藩校致道館で庄内論語の素読 ・先端生命科学研究所 バイオラボ棟見学 ・「生命はどのようにヒトに進化したのか、そして君は何のために生きているのか」 講師: 富田勝(環境情報学部教授、先端生命科学研究所所長)
3日目	・ミニ修験体験(羽黒山踏破、滝打ちなど) ・「修験と古代人の魂観」講師: 大出敦(法学部教授) ・八朔祭見学
4日目	・マインドマップ2作成 ・懇親会 終了後現地解散

【関連企画】

・日吉メディアセンターの協力で庄内関連図書を展示(6/6~7/23)



HAPP

日吉行事企画委員会（HAPP）は春学期に新入生歓迎行事を実施しています。秋学期には、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催しています。2016年度の新生歓迎行事は、6つの企画（計9回の異なる催し物）が行われました。毎年恒例となっている、舞踏の公演、義塾名誉教授や著名人による講演会、清家塾長と日吉の森を歩く企画、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」に加え、今年新たな試みとして、日吉メディアセンターの中でコンサートが3回催されました。通常図書館は、静けさが求められていると思われがちですが、このようなイメージをあえて壊すと言っても過言ではない企画となり、結果、とても好評でした。また、秋学期のための企画公募の審査も無事終了しました。今年度は応募件数が2件と例外的に少なく、審査の結果、1つの企画が採択されました。HAPPの活動の詳細は、HAPPのホームページをご覧ください。（<http://happ.hc.keio.ac.jp/index.html>）

（石井明）

2016年度新入生歓迎行事一覧

No.	企画名	日程
1	大野慶人舞踏公演 —土方巽舞踏大解剖—	4月22日（金）
2	物語の世界IV 講師：亀山郁夫	5月12日（木）
3	大学体育施設紹介と体力および体組成測定	5月12日（木） ・19日（木） ・26日（木） ・6月9日（木）
4	ライブラリーコンサート in 日吉 —図書館がコンサートホールになる3日間—	5月20日（金） ・23日（月） ・24日（火）
5	塾長と日吉の森を歩こう	5月21日（土）
6	日吉音楽祭 2016	7月3日（日） ・9月24日（土）

学習相談

2016年度春学期学習相談活動報告

今年の相談件数は、昨年比で40件ほど増加しました。また今年度から新たに、相談時にアンケートを記入してもらい、フィードバックを得る試みを始めています。その結果、利用者の満足度の平均値は極めて高く（4点満点で3.78）、2008年から始まった本活動への評価を再確認することができました。相談活動の他には、昨年に引き続き新入生を対象としたトークイベント（4月25日）や初學者向けのレポート・プレゼン講座（6月22日、24日）を開催しました。さらに展示企画「レポ松さん～脱・お粗末レポのWord術～」（6月28日～）では、週替わり展示やクイズ企画などにも新しく取り組みました。これらのイベントを通し、ピア・メンターは経験したことを整理し、塾生と同じ学習面の悩みを共有しています。今後も絶えず変化する塾生のニーズに、手厚く応えたいと思います。

（日吉メディアセンター 友野詩穂）

レポートの着眼点

学習相談の活動の一環として、「レポ松さん～脱・お粗末レポのWord術～」というタイトルで、レポートに関する展示を行いました。今期の展示は週替わりで展示物を入れ替え、Wordでの参考文献の記し方や、図・表の挿入方法等を紹介し、体裁を整える必要性を訴えました。レポート執筆において内容を充実させることは重要ですが、文体の統一や書式の順守といった、形式面を疎かにすることは避けなければなりません。学習相談にて、塾生の文章に接すると、内容は良いのにも関わらず、形式面への注意の欠落によって、文章全体の印象が良くないレポートが見受けられます。学習相談の展示により、内容だけではなく体裁にも関心を寄せてもらい、よりよいレポートを作成する動機となれば幸いです。この展示を行うにあたり、大学院生ピア・メンター及び日吉メディアセンター職員の方々のご協力が不可欠でした。改めましてこの場をお借りして感謝申し上げます。（商学部2年 吉田大喜）

「私たちだからこそ」のセッションを

春学期、学習相談で開催した各セッションでは、参加してくれる学生たちを巻き込んだインタラクティブを重視しました。新入生向けトークイベントでは、手を挙げにくい人のために紙で質問を受け、時に登壇者が「逆質問」する形でコミュニケーションを取り、参加者に寄り添う形で具体的な疑問や不安に答えていきました。またレポート・プレゼン講座では、参加者同士でディスカッションする時間を作り、資料作成に必要な表現方法を互いに学び合える試みを行いました。

ピア・メンタリングは、相談する側もされる側も、対等の立場です。インタラクティブを通じて互いに学びを得られることが肝要であり、それこそが私たちピア・メンターにとっての醍醐味と言えるでしょう。今後もピア・メンタリングの「肝」となる理念を具体化し、それぞれのセッションに落とし込んでいくことで、私たち学習相談ならではの「学びの場」を作っていきたいと考えています。（大学院商学研究科2年 森浩気）

研究と交流の場 「研究の現場から」

〔第16回〕15世紀ローマにおける聖人称揚と美術 —フランチェスコ会の活動を中心に

15世紀ローマにおけるフランチェスコ会の聖人シエナの聖ペルナルディーノ称揚のあり方について発表させて頂きました。特に、サンタ・マリア・イン・アラチェリ聖堂にあるブファリーニ礼拝堂壁画を取り上げ、S.フロイトのタブーの概念を援用しながら、同礼拝堂壁画に聖人伝を絵画化する際には、聖人が生前に異端視された記憶への接触を回避する意図の下、様々な工夫が凝らされていることを指摘しました。そのなかで、従来は単なる装飾として捉えられていたあるモチーフにこそ、当時の聖人崇敬の盛り上がりが見出されている可能性を新たに提言しました。様々な分野の方々から頂いたご意見を今後の研究に活かして参ります。ありがとうございました。（荒木文果）

〔第17回〕寛容な社会とは？

最近よく「不寛容な社会」という表現やそれに類する表現を目にした耳にしたりします。逆に前提となっているはずの「寛容な社会」がどのようなものなのか示唆はあるものの、その姿がはっきり見えません。

寛容な社会が実際どのようなものかは簡単に答えが出せない、また、それが果たして一般的に思われているように目指すところなのかも容易には言えないと思います。例えば、ヘイト・スピーチが蔓延する社会を不寛容な社会ということもできますし、表現の自由を極限的に容認しているという意味で寛容な社会ということもできるからです。今回は、「寛容」という概念と形容詞としての「寛容な」社会がどのようなものなのか、昨今の議論を紹介し、その可能性や課題について考察しました。（沼尾 恵）

〔第16回〕アカデミック・ライティング研究と指導 —「ジャンル」によるアプローチ

本発表では、ライティング教育において重要とされる「ジャンル (genre)」という概念に焦点をあて、アカデミック・ライティングを指導する方法を紹介しました。一例として、学術論文の序論や結論は別個のジャンルであり、その目的、構成、レトリックが異なります。ジャンルに基づく指導では、扱うジャンルが有する特徴を理解することから始まります。そのうえで、ジャンルごとに論の組み立て方を学ぶことにより、書き手の論理的思考力や読み手に対する意識が効果的に養われ、コミュニケーション能力の向上に繋がるという見解を論じました。本発表を通じて、様々な分野でライティング指導に関わる教員の皆さまの所感や疑問を共有させていただき感謝申し上げます。（大野真澄）

〔第17回〕文学と思想のあいだ —『クリティック』誌にみる書評の可能性

フランスの書評誌『クリティック』は、1946年にジョルジュ・バタイユを中心に創刊されました。1962年に没するまで、作家はこの雑誌に数多くの論考を発表します。バタイユの著作は、多岐にわたりますが、その関心の核には一貫して、「語りえぬもの」すなわちバタイユが言語の主体の外におけると定義する脱自の経験がありました。「語りえぬもの」をめぐる、文学と思想との間で執筆活動を続けたバタイユが、『クリティック』誌を編集し、しばしば出版の困難に見舞われるものの、同時代の知見にふれながら著した「書評」。それがバタイユの新しい学問の構想に果たした役割を、49年のシモーヌ・ヴェイユ論を端緒として、考察しました。（中川真知子）

第18回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

今年度最後となる「研究の現場から」を12月14日に開催します。経済学部の新島先生と文学部の中谷先生がそれぞれのご研究を紹介して下さいます。いずれもとてもワクワクする題目です。軽食と飲み物をご用意しますので、どうぞ気軽にお立ち寄りください。

これからも、「研究の現場から」では日吉キャンパスに着任されたばかりの方々や、留学・サバティカルから復帰された方々を中心に、ご自身の研究紹介と交流の場を提供していきます。我こそはという方がいらっしゃいましたら大歓迎ですので、センターまでご一報ください。

（工藤多香子）

12月14日（水）18:15～ 来往舎101にて

・新島 進（経済学部）

「デュシャン〈大ガラス〉と初音ミク——4次元と3次元と2.5次元と2次元」

・中谷彩一郎（文学部）

「古代ギリシア恋愛小説の世界～エクフラシスを中心に～」



「研究の現場から」は読者交流サロンとして、毎回2名の教員の研究分野を総合し、和やかな雰囲気の中で懇話する企画です。程度をとりながら学際分野を越えて交流を深めていただけます。

第十八回 12月14日（水）18:15～ 来往舎1階101

・新島 進（経済学部准教授）
「デュシャン〈大ガラス〉と初音ミク——4次元と3次元と2.5次元と2次元」

・中谷彩一郎（文学部准教授）
「古代ギリシア恋愛小説の世界～エクフラシスを中心に～」

★対象：教職員 / ★費用：無料 / ★申込：不要

日吉キャンパスではまだ2名の教員が様々な領域で研究活動に取り組んでいますが、お互いの研究を知り、情報交換し合うことで、さらに素晴らしいアイデアが生まれることもあります。是非、まず知り合いになることが、より豊かな研究活動への第一歩となる教員研究センターは考えます。ぜひお気軽にお立ち寄りください。

主催：教員研究センター toiwase-h@hust.keio.ac.jp



【日吉キャンパス公開講座】地方の力と「再生」

10月1日(土)～12月3日(土)全8回16コマ
3時限(13:00～14:30)、4時限(14:45～16:15)
第4校舎 J29 番教室(11月26日のみ J21 番教室)

【神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座】文化としての病と老い

10月12日(水)、10月24日(月)、10月29日(土)、
11月16日(水)、11月26日(土)、12月15日(木)
日吉キャンパス内(10/12、10/24、11/16、12/15は第4校舎、
10/29、11/26は来往舎)

【日吉学】第3回

日吉の森で縄文ランチ! ドングリクッキーは美味しい?
11月12日(土) 13:30～16:45 第2校舎3階232

【HAPP】

鳥の思想と未来—日本の縮図を沖縄の「神の島」から考える—
『久高島オデッセイ第三部風章』上映とトーク(仮)

2016年12月2日(金) 13:00～17:30
来往舎 シンポジウムスペース

慶應義塾大学コレgium・ムジクム・オペラプロジェクト2016
《ドン・ジョヴァンニ》

2016年12月18日(日) 17時～、23日(金・祝) 15時～、
25日(日) 15時～
協生館内 藤原洋記念ホール

学会・ワークショップ開催支援

当センター所員が企画する研究会やワークショップ等を経費・
広報の両面から応援する制度です。所員の方々が参加できる
研究・交流の場を広げることを趣旨として、開催に伴う経費の
助成や、日吉キャンパス内やウェブでの広報をお手伝いします。
募集は毎年2回、春学期開催分は1月末日まで、秋学期開催分は
7月末日まで受け付けています。次回の締切は1月31日(火)です。
ふるってご応募ください。なお、経費を必要としない広報支援に
ついては随時受け付けています。

【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】
プレゼンテーション・コンペティション

2017年2月6日(月) 14:00～18:00
来往舎シンポジウムスペース

11月

12月

2017
1月
2月
3月

2016年度のテーマは「地方の力と『再生』」です。「地方」は、国の政治的中心である「中央」に対する言葉です。世界全体でも「中央」の役割を担うとされる国もあれば、「地方」と見做される国もあります。宇宙に目を向ければ、私たちの住む地球は銀河系の辺縁の「地方」でもあります。「地方」は決して中央に「隷属」しているわけでも、経済的・文化的に劣るわけでもありません。また私たちは東北や熊本での地震で、「地方」と「中央」の関係や、復興にかける地方の姿を目の当たりにしてきました。本講座では、「地方」の持つ力について、様々な角度から考えていきます。10月1日から全8回で、12月3日が最終回です。(山下一夫)

【研究の現場から】第18回

12月14日(水) 18:15～ 来往舎101 →特集V

新島 進(経済学部)

「デュシャン(大ガラス)と初音ミク—4次元と3次元と2.5次元と2次元」
中谷彩一郎(文学部)

「古代ギリシア恋愛小説の世界～エクフラシスを中心に～」

【晴読雨読】第七弾

12月21日(水) 18:30～ 来往舎 小会議室

求ム・来往最前線情報!

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、
講演会、ワークショップのお知らせ(日時・内容・研究会名・担
当教員・連絡先)、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下
さい。教養研究センターへ: toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

【学会・ワークショップ等開催支援】春学期開催分募集

申請締切 2017年1月31日(火)

【教養研究センター選書出版】

2017年3月予定

*各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私の苗字自慢

今年の4月から教養研究センターに参りました、圃目(くじめ)と申します。教養研究センターは代々珍しい苗字が多いそうですね。過去のニューズレターを参照していましたら、この欄の苗字自慢の多いこと……。「圃」の字、読まれないのはもちろんですが、PCで表示できないことが多いし漢和辞典でもたまにしか載っていないし、珍しさでは歴代の皆さんにも負ける気がしません。くじ引きの「くじ」という意味があるのだそうです。これまでのところくじ運は人並みですが、いつかこぞというときに大当たりを引けるのではないかと期待しています。

苗字のおかげで教養研究センターにご縁ができたのかも半分くらい思っておりますが、机上で学ぶだけでなく学びの場に携わりたいと思っております。私にとって、教養研究センターは興味のわく活動ばかり。様々なことを学ばせていただいております。下手の横好きなのですが、ポスターを作ったり、文章を編集したり、ホームページを更新したり……そういった作業が好きなので、広報を担当できて嬉しく思っています。教養研究センターの興味深い活動について、塾内外で認知がさらに広まっていく様々取り組んでいけたらと思っています。(圃目優子)

